

# 島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第2号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン  
研究会事務局  
所在地：〒690-8504  
島根県松江市西川津町 1060  
島根大学法文学部 長岡研究室  
発行：2014年11月8日

## 【 研究小論 】

### アテネ雑感

副会長 長岡真吾

2014年7月に"The Open Mind of Lafcadio Hearn"をテーマにした国際シンポジウムがギリシアのレフカダ島で開催された。以下は島に行く前に訪れたアテネについての雑感である。

ギリシアはわたしにとって初めての土地だった。シンポジウムでは、ハーンが米国入国の際に「所属する国」としてギリシアと書いたことを出発点として話すことにしていた。ハーンというフィルターを通して「ギリシア」を見るなどということはできるだろうか。生地レフカダ島や母ローザが晩年を生きたコルフ島ならまだしも、アテネはどうなのだろう。疑問と期待が入り混じっていた。

アテネの空は天上に海が拡がっているような青さだった。7月に入ったばかりの街は乾いた白い光に溢れ、街から見上げる山上のアクロポリスが天空の海原に浮かぶ大理石の船団のように見えた。込み合った建物のあいだを駆け登っていくバイクの音や人びとの話し声が、波音めいてあちらこちらに響いていた。集合住宅も多く、ずっと続くバルコニーの列や街路樹の豊かさが印象的だった。通りに面した窓を色とりどりの花で埋め尽くしている人たちも多くいた。大通りは賑やかだったが、一歩路地に入ると、いにしへの埃を被せたような静けさが街の各所に残ってじっと息を潜めていた。閉じられた古い家が突然現れて、壊れた窓からは奥行きのない闇がそっと覗いていた。

アテネでは一日市内観光をすることになっていたが、わたしはいかなかった。シンポジウムやその進行についての準備のことばかりが気になり、余裕がなかった。それでも午後遅くには一応の目処がついて、ホテルの近所にあるスーパーマーケットに買い出しにいった。店の奥に量り売りの塩漬けオリーブが何種類も置いてあって、大きな陶器のボウルが広いケースのなかにくっつきも並んでいた。担当してくれた店の人の一番好き

な種類を尋ねて、それをビニール袋に入れてもらった。レジの女性も「そのオリーブ、おいしいわよ」と英語でいっていた。その笑顔は今も覚えている。

ホテルの部屋は6階ぐらいいった。オリーブと〈ミトス〉ビールを狭いバルコニーに持ち出して椅子に腰掛けた。向かいの建物が目の前に見え、白い壁のベランダに緑色の日よけをかけている部屋が目についた。開け放たれたドアも覗き見えて、奥から音楽が流れている。ギリシアの夏の風がビルの壁を伝って上に吹き上げていく。こちらのビルの影が向かいの建物に黒い切り抜きとなって映っている。三羽の鳩が向かいの建物のてっぺんをかすめて、わたしの目の前を滑空していく。

静けさを破るようにモーターバイクの音が下の道を近づいてくる。オリーブをもうひとつ口に放り込んで、片手にビールを持ちながら、手すりまで出してみる。下を見ると、両肩をあらわにした腕の太い男がバイクに乗ってやってくる。ヘルメットもかぶっていない。そしてなにかを大きな声で叫ぶ。するとどこかの建物のなかから女の音がする。男が短くもう一度叫び、そのまま待つ。しばらくすると女が通りに出てきて、なにかを急いでいいながら男の後ろに乗る。二人はそのまま走り去る。まるでサンダルで駆け出すみたいに。

そのとき、なぜか急にハーンのことを鮮明に思い出された。ハーンという旅人もこんな場面に出くわしたのではなかったか。バイクは当時なかったかもしれない。ビールなど片手に持っていなかったかもしれない。しかし、世界の響きや感触をこんなふうに肌で感じたことがあったのは間違いない。そして彼は通りへと降りていったはずだ。



アテネのホテルから  
執筆者撮影

手すりからふと左手のほうを見て、アクロポリスの丘がすぐ上に見える場所だったことに気づいた。空をくり貫く古代神殿を仰ぎ見ながら、この近さと遠さがハーンらしさかもしれないと思った。ところで、あのオリーブより美味しいものはその後の旅でもついで食べたことがない。

## 【 ハーンとわたし 】

### 思 い 浮 か ぶ 事

#### 嵐 元宏

「ハーンと私」という題を与えられて私に先ず思い浮かぶのは、小学生のときのことである。私は島根県邑智郡田所村立田所小学校の5年生であった。その学校の、昭和初期に建てられ、今では登録有形文化財として指定、保存されている講堂を、詰襟服の大学生数名が訪れた。時はあたかも1950年、ハーン生誕100年の年。その記念事業として島根大学の学生さんが、島根県各地の小学校を、ハーンを紹介しながら行脚しておられたのであった。

具体的なことはあまり思い出せない。ただ、涙を垂らした小学5年生にも、小泉八雲、ラフカディオ・ハーンという名前は強烈に植え付けられた。その印象は、勿論、小学生がこんな言葉を知るわけもないが、「妖」、「美」、「闇」、「霊」、「怪」等々を縋り交ぜたようなものであった。おそらく「雪女」、「耳なし芳一」、「むじな」などの物語を聞かされたものと思われる。当時の田所村といえば、舗装道路など全くない田舎で、松江から汽車、バスを乗り継いでほとんど丸一日かかる山間の僻地であった。そのような所まで足を延ばされた当時の学生さんの情熱と努力に、今更ながら頭の下がる思いをしている。

次いで、「ハーンと私」で私に思い浮かぶのは、梶谷泰延先生の温顔である。優しい眼鏡越しの眼差し、やや巻き舌の出雲弁、(これは失礼であるが)少し出雲訛りのある英語、全てハーンと直結している。島根大学に入って梶谷先生の英語購読教材はハーンであった。今でも手元にあるが、北星堂書店の”Hokuseido Hearn Texts”のうち、“GLIMPSES OF UNFAMILIAR JAPAN (A SELECTION): 昭和27年3月31日初版発行、定価60円”とある。”My First Day in the Orient”, “A Pilgrimage to Enoshima”, “Matsue”, “By the Japanese Sea”, “In a Japanese Garden”が収録されている。授業ではこのうち最後の3篇を読んでいる。先生が、地元学生の興味を引くものを選ばれたのであろう。ハーンと言えば、早朝の松江、宿を震わせる米搗

きの音、また、大橋を行き交うカラコロという下駄の音、と結びついたのは、梶谷先生のこの授業からであった。授業の合間に、先生は持ち前の訥々とした口調で、ハーンがヘルンになった経緯、西田千太郎との交友などについて語られた。滋味深い授業であった。

しかし、18歳の新入生にとって、ハーンの記事はやや難解、古風に思えた。Hemingway, Saroyan等の簡潔、明快な文章の方が取りつき易く、魅力的であった。現在、この「ハーン研究会」に入れて頂き、ハーンの素晴らしさを改めて認識するにつれ、折角、大先生が目の前におられたのであるから、もっとご指導を仰ぎ、もっと勉強しておけばよかったと悔いるが、今更遅い。

#### 伯耆の小さな旅

#### 副会長 吉川 進

今年の7月中旬、嵐元宏さんの運転で常松正雄先生と私との三人で鳥取県中部の東郷池の南岸に花菖蒲(はなしょぶ)を観に出かけた。花菖蒲の時期は終わり、その数は少なく池は広々として静かであった。池を取り囲む周辺の山々の緑は新鮮で見事ではあるが夏の色彩に変化していた。三人は岸辺のベンチに坐り空や池の水面を眺め、用意してきたコーヒーとクッキーを食しながら言葉少なに語り、来年は時期遅れにならぬようにと話し合った。

実は、この池に来る途中嵐さんの提案によりハーンが述べている下市に立ち寄った。ハーンは中国山地を横断し松江に向かう途中、妙元寺での盆踊りを見て感心し踊り手の動きを詳細に描写している。その庭は本堂の前にあり想像していたより狭い。百坪程度であろうか。庭の左側から本堂の背後に登ると小さな墓地がある。普通見かける長方形の墓石の他に卵型の50センチほどの高さの墓石も数多くある。この墓地の片隅にはこの丸い墓石が寄せ集めてある。無縁仏の寄せ墓である。これらの丸い墓石は日本海の波に洗われてできた自然石である。お寺の母屋から姿を現した住職さんと二言三言話をしてここを辞した。

妙元寺から5、6分で日本海が望める高台に着いた。ここは花見潟という視界を遮るものがない遠浅の砂浜で、遠く青い海に延びている。眼下を見下ろして驚いた。沖の海面に続き、手前に細長く砂浜、さらにその手前に墓地があり、そして崖を登ると我々がいる高台である。真下には幅50メートル長さ400メートルほどの墓地が東西に延びている。いわゆる花見潟墓地である。中世後期以降(400~500年前)から発生した自然墓地であり、約2万基の墓石が立ち並び、何十万にも及ぶ死者達が眠っている。おそらく寺に埋葬されぬ一般の人々、年寄りや赤ん坊、男や女たちがそれぞれの

生涯を終えて、日本海の涼風に憩い潮騒を耳にし海鳴りに脅えながら、時の流れの中に身を寄せ合って今に至っているであろう。墓石の間にお参りしている人達の姿がちらほら見える。物言わぬ死者達が帰ってくる盆になったら迎え火か送り火を一望するために再訪したい願いが募る昨今である。

(平成 26 (2014) 年 8 月 30 日)

## 【 読書会に参加して 】

### 小泉八雲読書会に入会して

野田泰稔

2012 年末に読書会に入会して間もなく、八雲の講義集 *On Art, Literature and Philosophy* に所収の“On Romantic and Classic Literature, in relation to Style”のテキストをいただき、原文で読み、世の中にこんなに難解な英語があるということに認識し苦悶しました。それでも、常松先生や担当の皆様の真摯で熱心な議論や考察をうかがい、文学に素人の私では分かるところはまずなかりと認識しながらも、何とか勉強してみたいと思うようになりました。次にいただいたテキストは *Out of the East* のなかの“At Hakata”でありました。その第 1 章では人力車に乗った八雲が博多に向かう途中の様子の記事があり、比較的やさしい文章で始まり、次第に抽象的、哲学的表現が増して難しくなりました。その第 2 章では、八雲が浄土宗の寺院を訪問し、納めてある銅鏡をみて考察をめぐらす記事がありました。勉強中は皆様と共に、文章の意味を理解することに集中しておりました。「銅鏡は一方側のみ磨いてあり他方側は浮き彫りにして、木や花、鳥や動物や昆虫、景色、伝説、幸運の象徴、神々の姿がデザインされた飾りがある。そして、一方側鏡面から反射された光がスクリーンや壁に投影されるとき、光の円の中に、背面にデザインされた明るい画像を見ることができる」の文章があるところで、“On the Magic Mirrors of Japan”の言葉があり、はっと我に返りました。これは私が半導体の欠陥検査法の一つとして知っている魔鏡についての議論をしているのではないかと気づきました。

その技術は、中国殷の時代(BC1700 年頃)の鏡面研磨技術であり、のちに日本に伝承され、背面の阿弥陀仏を投影する魔鏡やキリスト像を投影する隠れ切支丹鏡として有名で、近年和鏡師により再興された技術であります。一方、現在私たちが知っている日本独特の魔鏡技術 Makyoh Technology は、5 nm ( $5 \times 10^{-9}$  m、通常原子 50 個分) の高低差の緩やかな凹凸を有するシリコンウエハをはじめとする半導体材料、コンピュー

ター用のハードディスクや液晶用のガラス基板などが、超鏡面であるかどうかを評価するために不可欠の現代の重要技術であります<sup>1)</sup>。本文を読んで気が付くのは、銅鏡の裏面に彫った際の力が表面に影響を及ぼして、鏡面の表面に発生した微小な凹凸が投影面上に表示される点が共通していることです。

東西文明の違いを求めて来日した八雲は、産業革命を経た西欧文明と近代的な自然科学を意識しながら、日本における様々な経験を分析し、まとめて全体に渉る普遍的通覧により文明の普遍性とそこに潜む人間性を追求したのではないかと、それによって今日でもその記述が通用する作品が出来上がったのではないかと勝手に思うようになってきました。私自身には文学作品の執筆過程がどのようなものであるか分からないために、文章の一つ一つを読んで最適な日本語を見付けることは難しいのでありますが、それぞれの作品がどのように展開されてゆくかを常に楽しみにしながら読書会に出席させていただいております。

1) 釘宮公一: 温故知新の鏡面評価技術 魔鏡、表面科学、Vol.16, No.1, pp.82-85, 1995.

## My Stay in Japan Is Full of Impressions

Shoaib Saboor

I am a young boy from Afghanistan, a post graduate student and a social activist. Oh, I feel very fortunate of being in Japan, a really amazing country with amazing people. It is my first trip abroad of my life with such an excitement, and probably will remain the best life ever. Apart from inside-class learning, real learning and joy was all about excursions across the country. I have been to Tokyo, Fukushima, Kyoto, Osaka, Hiroshima, and many other cities; and delved into the old Japan of festivals, traditional villages and brief glimpses of geisha.

Once a friend asked me, “what did you find the very impressive about Japan?” I then didn’t have any answer except ‘everything’. Japan is blessed with beautiful landscapes and impressively creative structures and is a scenic marvel everywhere. You, as an outsider, certainly fail to find any shortcomings.

I found Tokyo and Osaka a masterpiece cities of idealistic technologies and infrastructures. Moving around the city, you feel everything is exactly structured and clean as if you are in computer game scene, looking at streets, street lines, shops, buildings, restaurants and houses. I mostly felt to

remove my shoes and walk bare foot around the city as well historical cities like Izumo or Kyoto are also much interesting, having the old temples with their own still up to now is a big asset of history and culture of Japan.

Everybody finds the people of Japan the most respectful people in the earth—I also did find the same. Japan's people were very friendly and welcoming. They are anyway very professional, hardworking, on-time, kind and stylish in their wearing.

I was amazed that majority of people read something, and busy with their electrical gadgets in the metros and buses. Some were deeply asleep in the metro but were just waking up the moment when their stations are announced. But one thing I could never figure out is whether Japanese work to live or live to work and/or their work is their life. In Tokyo, soon I came to know that majority of people live undergrounds and in high floors. Once I lost my way back to hotel and that was one of the best sightseeing.

## フクト・オン・ラフカディオ

### 高橋 栄

ハーンの読書会に参加させていただいて、ゆっくりと頭をもたげてきた2つの思い出について書かせていただきます。

まず、最初は、ハーンの大社参拝のことである。彼は、明治23年(1890)8月30日、日本における最初の赴任地・松江に着いた。そして、その2週間後9月13日に、出雲大社への旅に出かけた。「当時、出雲大社へ行くには、宍道湖を蒸気船で庄原(現在の出雲市斐川町庄原[筆者註])に渡り、そこで人力車に乗り換え、出雲今市から高瀬川沿いに西進し、浜根、小丸子、原町などを経て神光寺橋を渡り、馬場通り、大鳥居通りを通過して」(工藤、p.46)ようやく杵築(現在の出雲市大社町杵築)にたどり着くという具合だったようだ。

ところで、当時、松江-庄原(庄原)間の蒸気船(汽船)運行の様子はどうか。ハーンは、東京から同行していた通訳の真鍋晃と一緒に、午後1時松江を出発した(工藤、p.46)ことになっている。明治40年(1907)7月27日改正の合同汽船時刻表を参考にすれば、午後1時20分松江発の定期便は午後3時30分庄原(庄原)着となる(池橋、p.179)ので、所要時間は2時間10分である。だから、*Glimpses of Unfamiliar Japan, Vol.1*におけるハーン自身の次のような記述も十分うなずける。

There is not time to see much of Shōbara if I

hope to reach Kitzuki before bedtime, and I have only a flying vision of one long wide street (so picturesque that I wish I could pass a day in it), as our kuruma rush through the little town into the open country, into a vast plain covered with rice-fields. (Hearn, p.179)

池橋達雄先生の編著になる『庄原歴史物語』によれば、この汽船航路については次のように述べられている。

宍道湖に汽船が登場したのは明治10年代初めのころのようですが、松江平田間、松江庄原間の汽船定期航路ができたのは明治20年(1887)ごろです。この2本の航路のうちまもなく松江庄原航路が優位に立ちました。それは、下庄原村が船川の浚渫をして航路の整備をしたことと、24年度における国道28号(新山陰道)の完成のためです。(新山陰道がまたぐ[筆者註]新川には新しい橋がかけられ、24年10月10日には開通式が行われ、橋名は八雲橋と命名されました。出雲と八雲は姉妹のようなことばです。出雲を代表する名橋というのが命名の由来でしょう。(中略)汽船の発着した場所はいまでも町内地名を南灘・中灘といいます。そして、ここから町部の中心を南北に走る国道へ出る通りを汽船町といいます。この一帯には人力車を引く人たちや、汽船の荷を上げおろしする人たちや、それらの荷を馬車で運ぶ人たちの出入りが多く、また旅客相手の休憩所や商店なども並び、なかなかの賑わいを呈しました。

(池橋、p.177)

だから、ハーンはその賑わいの中、庄原の南灘か中灘で汽船を降り、人力車に乗って汽船町を通り、庄原地内の旧国道に出て、新川に架かっている、新築後八雲橋となる1年前の古い橋を渡り、現在の出雲市今市町へと急いだのである。

ところで、明治20年代の汽船の発着や庄原地内の事柄に私がこだわっているのは、私の生家とその庄原地内にあったからである。南灘とか中灘、汽船町は今でもその名が存在し、私の生家から歩いて5分少々のあるところにある。また、明治24年(1891)に新川(昭和14年[1939]に廃川となる)にかけられた橋・八雲橋のあった場所から歩いて10分少々のあるところに、昭和35年(1960)から昭和38年(1963)まで私が通った中学校・八雲中学校(昭和40年[1965]に斐川東中学校に改称)があった。八雲中学校は旧新川跡地に昭和25年(1950)に新築されたが、その「八雲」という名称は、旧新川跡地に架けられていた八雲橋にちなんでいた(池橋、p.268)。

もちろん、ハーンの世界への帰化が実現し、ラフカディオ・ハーンが正式に小泉八雲となったのは、明治29年(1896)2月だった(工藤、p.211)から、明治24年(1891)新築の八雲橋と、ましてや八雲橋にちなんで名づけられた八雲中学校の「八雲」は、小泉八雲の「八



雲」からとられたものではなかった。しかし、将来、小泉八雲となるハーンが、八雲橋となる 1 年前の古い橋を渡り、将来、八雲中学が建つことになる新川を眺めながら、出雲大社への道を急いでいたのを想像し、八雲中学校を卒業した私が今ハーンの著作に親しんでいることを考えあわせると、なんだか遠いとおい偶然のつながりめいたものを感じざるを得ない。

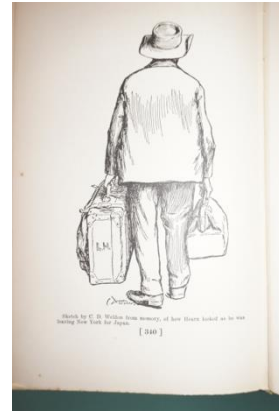
次に、松江・出雲を訪れこの土地柄をととても気に入ってくれたイギリス人イアン・ルーボウ(Ian Lebeau) 先生のことである。

私は、昭和 62 年(1987) 6 月末から 9 月初めにかけて、イギリスのレディングにあるレディング大学・応用言語学センター(Centre for Applied Language Studies, University of Reading)の夏季研修に参加した。そこで、私は、講義とともに研修の企画運営を担当するイアン・ルーボウ先生と親しくなった。当時 39 歳の私は同じ年頃のルーボウ先生とは話がしやすかった。

さて、そのルーボウ先生が、平成元年(1989)、日本の大学の職探してこちらへ来ることになり、ついでに私の家も訪ねてくることになった。まだ 3 月はじめの寒い時期だったが、彼は 3 日から 6 日まで私の家に滞在した。

その時、彼が言ったことで強く印象に残っているのは、「新幹線に乗ったが、東京から岡山まではずーっと街が続いているのか」とか、「伯備線に乗って始めて自然の風景を眺めることができてほっとした」とか、松江を案内するため車で湖北線(国道 431 号)を走った際に宍道湖を見て、「レマン湖を連想する美しい眺めだ」などであった。また、松江城の天守閣から見下ろした瓦屋根の美しさや、斐川の築地松の風景もとても気に入ってくれた。

さて、ようやくハーン先生の登場である。イアン・ルーボウ先生をラフカディオ・ハーン旧居に案内した時のことである。あの、両手に鞆を持ったハーンの後姿のスケッチを見て、イアンは、「これは、本国で食い詰めたイギリス人の、典型的な国外移住者の姿だ」と言い放った。私は、ハーンは松江が世界に誇る文学者なのに、なんてことを言うんだと、ショックを受けた。でもそれは、同じイギリス人の直観として、彼の口から自然に出た言葉だったのだ。この時、私はひそかに 2 つのことを思った。イギリス人は、本国で食い詰めると旧植民地など海外で食いつないでいけていなあ、ということと、イアンあなたも彼と同じ身の上で、日本に職探しにきたのではないの、ということだった。その後イアンは日本の大学で何らかのポストを得たようだが詳細は知らない。当時、イギリスはサッチャー首相(在任期間 1979-1990)の時代で、「イギリス病」を克服するために、経済の復興と結びつく理系の人々が優遇され、文系の大学卒者には恵まれたポストが少なく、イアンも苦労していたのだなあ、と今となっては考えている。



(C.D.ウェルドンによるスケッチ: Tinker, p.340)

何はともあれ、イアンは松江や出雲の美しい風景にふれ大変喜んでくれた。これは空想だが、長くこの地に生活することになったとすれば、彼もまたハーンに似て、“an advanced industrial country, Japan” よりも、古い文化と未開発の自然が残る「出雲の国」を堪能してくれたかもしれない。

引用文献:

工藤美代子『神々の国—ラフカディオ・ハーンの生涯【日本編】』東京:集英社、2003。

池橋達雄(編著)『莊原歴史物語』出雲市:莊原公民館、2004。

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan, Vol. 1.* Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1894.

Tinker, Edward Larocque. *Lafcadio Hearn's American Days.* New York: Dodd, Mead Co, 1924.

## 【 読書会の記録 】

事務局長 横山 純子

### 第59回例会

日時: 2014年4月12日(土) 14:00~16:00

会場: 島根大学附属図書館2階 ラーニング・コモンズ2

テキスト: “From the Diary of an English Teacher” p.430~p434, ll.10

参加人数: 15名

引き続き *Glimpses of Unfamiliar Japan* vol. 2 (1894) 所収の“From the Diary of an English Teacher” をなごやかな雰囲気読んでいます。

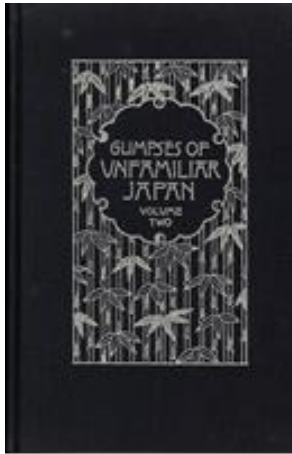
## 第 60 回例会

2014 年 5 月 10 日 (土) 14:00~16:00

島根大学附属図書館 2 階 ラーニング・コモンズ 2

前述のテキストの p.434,l.11~p.440,l.19

14 名参加



*Glimpses of Unfamiliar Japan vol. 2* 表紙

## 第 61 回例会

2014 年 6 月 14 日 (土) 14:00~16:00

島根大学附属図書館 2 階 ラーニング・コモンズ 2

p.440,l.21~p.446,l.7 14 名参加

## 第 62 回例会

2014 年 7 月 5 日 (土) 14:00~16:00

島根大学附属図書館 2 階 ラーニング・コモンズ 2

p.446,l.9~p.452,l.6 13 名参加

## 第 63 回例会

2014 年 8 月 23 日 (土) 14:00~16:00

島根大学 学生市民交流ハウス

p.452,l.7~p.457,l.30 10 名参加

## 第 64 回例会

2014 年 9 月 14 日 (日) 14:00~16:00

島根大学 学生市民交流ハウス

p.457,l.31~ p.464,l.24 13 名参加

8 月・9 月例会は今年の春に新しくできた学生市民交流ハウスを利用させていただきました。正門から近くの場合にあり、設備の整ったハウスを利用させていただいてとても良かったです。ただ一つ難点は、長机が三つしかなく、中庭の倉庫から長机を運んでくるのが大変でした。折りたたみの長机がもう二つ位あると嬉しいと思いました。読書会の会場に今後も島根大学附属図書館開館時には図書館のラーニング・コモンズ 2 を使わせていただこうと思っておりますが、図書館閉館時には学生市民交流ハウスを利用させていただきたく

思っております。これからもどうぞよろしくお願い致します。

## 第65回例会

2014 年 10 月 4 日 (月) 14:00~16:00

島根大学附属図書館 2 階 ラーニング・コモンズ 2

p.464,l.25~ p.470,l.6 10 名参加

常松先生よりハーンは意味をもって単語を用いているとのコメントあり、テキストに出てきた荒川亀齊について生誕地の碑等の紹介がありました。

テキストを読むということは単に字面を読むことだけでなく、その奥にある新しい世界を開いていくことだと思います。



荒川亀齊生誕地の碑 執筆者撮影

## 【 お知らせ 】

島根大学ラフカディオ・ハーン研究会では参加者一特に学生諸君の参加者を募集しております。皆さんの参加をお待ちしております。

お問い合わせは横山 (電話は、090-9416-9036, メールは、[junkoyokoyama827@yahoo.co.jp](mailto:junkoyokoyama827@yahoo.co.jp)) までどうぞよろしくお願い致します。



カラコロ広場のハーンの後姿 執筆者撮影

編集後記：2 号をお届けいたします。今回は多くの会員の皆様に寄稿いただき大変有難うございました。多彩な内容になったことを喜んでいきます。(高橋栄)